ジュリアン・グリーンの〈青春〉（一）

――一九二二年七月から一九二四年十一月まで――

井上三朗

目次

一　はじめに
二　感情生活
三　肉体生活
四　信仰生活
五　おわりに

（太字は今回掲載分）

一　はじめに

ジュリアン・グリーンの生涯については、一九一四年十二月の母親の他界までの子ども時代、母親の死後、ヴァージニア大学留学のためにアメリカに出発するまでの思春期、そして一九一九年秋から、一九二二年七月までのヴァージニア大学留学時代を検討したことがあった。[1] この小論では、その続きをなすものとして、グリーンがアメリカより帰国してから文学的出発をするまでの時期、厳密にいえば、一九二二年七月から二四年十一月までの時期を概観したい。この時期は、自伝第四巻『青春』において回顧されている。この自伝を主な参照材料としつつ、〈青春〉の時代のグリーンの生(の歩み)を明らかにしたい。

まず、一九二二年七月から、文学的出発をするまでのグリーンの外的・表面的な生の歩みをたどることからはじめよう。二二年の夏、アメリカを訪問していた三番目の姉アンヌといっしょに、グリーンは〈ロシャンボー〉という船で帰仏する。そしてコルタンベール通り十六番地にあるアパルトマンでの生活を、父親、二番目の姉マリー、アンヌ、五番目の姉リュシーとともにはじめる。[2]

父親は投機の失敗から、ヨーロッパ各地に莫大な負債をかかえていた。グリーンは父親の借金について、詳しくは知らなかった。だがたとえ中退であれ、大学を出た以上、父から独立して、自らの力で生計を立てる必要があったし、それに自分が進むべき道を決定しなければならなかった。そういうわけで、グリーンは一九二二年の十月、ジャンソン・ド・サイイ校時代の友だちであるポールの紹介で、職を得るべく、パッサージュ・ド・ラ・マドレーヌにある本屋を訪ねる。グリーンの仕事は本の配達であった。そのことを知った父親は、そのような仕事につくことに反対する。グリーンは仕事の内容にあまりこだわりをもっていなかった。彼は『青春』のなかで、「私に確かなように思われることは、もし父が賛成してくれていたら、本の配達係になることを受け入れていただろうという点だ。私の中の誇りは、地味な仕事への軽蔑以外のところで現

われていた」（V、一三〇九頁）と言っている。けれども父親に反対されて、本屋に勤める話は立ち消えになる。その後しばらくして、家族は〈ニューヨーク・ヘラルド〉という新聞に、ジュリアンのために、家庭教師を探しているとの広告記事を出す。広告が出てから翌々日、グリーンはあるアメリカ人夫婦から家庭教師の依頼をうける。グリーンが相手にする夫婦の子どもは、十二歳くらいの、勉強嫌いで手に負えない少年である。グリーンは地理を教えようとする。だが少年は授業を聞かず、逃げ、鍵をかけて部屋に閉じこもってしまう。こうして家庭教師の仕事は一回限りで終わる。

アメリカから帰仏した一九二二年七月当時、グリーンに文学を志す野心はあったのだろうか。すでにグリーンはヴァージニア大学に在籍中、『クォータリー・レヴュー(*Quarterly Review*)』という大学の雑誌に、英文で書いた短篇「精神科医見習い」（The Apprentice Psychiatrist）を発表している。一九二〇年のことである。二一年には「鉄格子」、二二年五月には「地獄」といった作品を執筆している。しかしフランスでの生活を再開した当初、作家として身を立てる決心はまだ固まっていなかった。グリーンの興味をひいたのは、文学ではなく、むしろ絵画である。グリーンは幼い頃、ダンテの『地獄篇』に挿入されたギュスターヴ・ドレの版画、リュクサンブール美術館所蔵の、ルコント・デュ・ヌイの「凶報の使者たち」の絵、またルーヴル美術館の、古代の裸体の彫像を見ることをとおして、人間の肉体美に開眼させられるとともに、美術作品を鑑賞することのよろこびを知った。さらにギュスターヴ・ドレの版画に表現された、「いちばん美しいと思える肉体のひとつ」（『夜明け前の出発』V、六七五頁）を鉛筆で画き写したりもしていた。人間の裸体のデッサンを画くという習慣は、幼児期から身につけていた。絵画への道は、幼い時代から切り開かれていた。『青春』のはじめのほうでは、グリーンが一人きりの部屋でディオニュソスの絵を画き、「何とも言いようのない不安」のなかで、「新しいと同時に昔の幸福」を味わっていたことが報告されている（V、一一八三頁）。グリーンが「不安」を覚えるのは、ディオニュソスが裸体であり、裸体を描くことが罪意識をもたらすからである。とはいえ、グリーンは子ども時代と同じように絵を画くことの「幸福」を見いだすのである。

絵を画くよろこびを再発見したグリーンは、毎日のようにルーヴル美術館に足を運ぶようになる。そして父親に、「画家になりたい」(『青春』V、一三〇一頁)との希望を伝える。父は息子の希望に異をとなえず、リュドヴィックに相談するよう助言する。リュドヴィックは姉のマリーと親しく、よくグリーンの家に遊びにきていた。それにかつて彫刻家であった。グリーンの望みを聞き知ったリュドヴィックは、写生することを覚えなければならないと言って、〈グランド・ショーミエール〉というアトリエに行くことを慫慂する(V、一三一四頁)。

こうして、グリーンは画家になるべく、カンパーニュ・プルミエール通りにある〈グランド・ショーミエール〉にかようことになる。けれども彼の努力は持続しない。というのも、アンリ・マティスの絵を見たことが、グリーンの野心をくじくことになるからだ。グリーンは父親に連れられて行った、コレクターのマイク・スタインの家で、マティスの絵を見せてもらう。マティスはピカソと同じく、現代絵画の巨匠である。しかしグリーンはルーヴル美術館の古典的な絵画によって美意識を養ったため、マティスの絵を見ても感動しないし、好きにもなれない。彼の絵はグリーンには、「下手な絵(barbouillages)」(『青春』V、一三一九頁)にしか見えない。マティスの絵を評価できなかったことが、グリーンを画家への道から遠ざける。グリーンはこのあとしばらくは、〈グランド・ショーミエール〉におもむく。だが画家になる野望はうすれ、結局、このアトリエに行かなくなる。

画家になることを断念したグリーンは、文学を志望する。友人ポールに推されて、書店を営むマドモアゼル・シルヴィア・ビーチを訪ねたグリーンは、英語とフランス語の両方ができるのだから、英語の本をフランス語に翻訳すればよいと勧められる。けれどもグリーンはシルヴィア・ビーチの勧めには従わない。翻訳ではなく、批評の仕事にたずさわるようになる。グリーンが最初に手がけたのは、ウィリアム・ブレイク論である。一九二三年には、ジードが『天国と地獄の結婚』を仏訳しており、ブレイクの名はフランスでも知られていた。グリーンがブレイク論を仕上げる正確な日付は定かではない。だが友人ポールの奔走のおかげで、「預言者ウィリアム・ブレイク」という表題で、雑誌『批評の頁(*Feuilles critiques*)』の一

九二三年九・十月号に掲載されることになる。

このちち、グリーンは批評的作品を世に問うていく。一九二四年には、チャールズ・ラム論、バイロン論、ジェイムズ・ジョイス論二篇、そしてサミュエル・バトラー論を、二五年にはサミュエル・ジョンソン論を様々な雑誌に発表する。さらに二六年にはシャーロット・ブロンテ論、二八年にはホーソーン論を公けにする。これらの作品のうち、ジョンソン論、ブレイク論、ラム論、ブロンテ論の四篇は、『イギリス組曲』(*Suite anglaise*)という表題のもとに一冊の書物にまとめられ、一九二七年五月に、カイエ・ド・パリという出版社から刊行される。

グリーンがブレイク論を書き、文学活動を本格的に開始した一九二三年の頃に話をもどすことにしよう。プレイアード版「全集」第一巻に付された年譜によれば、グリーンは二三年に長篇小説『フレデリック』の制作をこころみている。フレデリックといえば、グリーンがリセ時代に夢中になった級友の名前である。グリーンが自伝的な小説の作成をくわだてたことが推察できる。またブレイク論に取り組んでいたのと同じ時期に、グリーンは『ディオニュソス』という散文詩を完成している。[3] だがこの作品は一九九四年まで公表されなかった。グリーンは若干の短篇小説も執筆している。一九二二年十二月には、「理解されない男の日記」を、二三年三月には「人殺しの夢」を、二三年五月には、「ミシェル・オジエの偉大な作品」を、二四年五月には「決闘」を脱稿している。これらの短篇は、以前に書いた短篇と合わせて、一九八四年、『めまいの物語』という表題の作品集に収録して発表されることになる。したがって、一九二三年の時点では、長篇小説を手がけ、散文詩や短篇小説を完成させたものの、グリーンは「預言者ウィリアム・ブレイク」という批評的作品だけによって世に知られる存在にすぎなかった。

ところが、一九二四年になると、グリーンはより多くの人に名を知られるようになる。チャールズ・ラム論からサミュエル・バトラー論までの五つの批評的作品を世に問うたことは、前述したとおりである。さらにグリーンは、二つの注目すべき作品を制作し、発表している。『クリスティーヌまたは海辺の休暇』と『フランス・カトリック信者たちに対するパンフ

レット』とである。作成されたのは、後者が先である。しかし発表されたのは、前者のほうが早いので、まず前者から少しだけ説明することにしよう。『クリスティーヌまたは海辺の休暇』はのちに『クリスティーヌ』と改題されるが、一九二四年に書き上げられ、『ヴィタ（*Vita*）』という雑誌の同年八・九月号に掲載された。この短篇小説は語り手兼主人公ジャンの、聾唖者で知恵遅れの少女クリスティーヌへの愛をとおして、宿命的な出会いと不可能な愛とを物語っている。こののち、グリーンは創作作品において、他者との出会いを出発点に置き、宿命的な出会い、言いかえれば、他者の出現によって、存在基盤をくつがえされ、人間がいかに変貌していくかを描出していく。またグリーンのこのあとの創作作品は第四期（晩年）の三部作の小説をのぞけば、不可能な愛を主題としている。それゆえ、『クリスティーヌ』は構成面でも主題面でも、グリーンの文学の特徴を先取りしており、実質的には彼の処女作だといえよう。

次に『フランス・カトリック信者たちに対するパンフレット』について触れておきたい。この『パンフレット』はグリーンが自発的に起稿した作品ではなく、友人のピエール・モランジュの要請にもとづいて作成された。グリーンは作家フランソワ・ガショのところでモランジュを知る。彼はユダヤ人で、コミュニストであり、変革思想の持ち主であった。一九二四年当時、モランジュは作家と同時に編集者を志しており、雑誌『哲学』を主宰していた。グリーンの制作した二篇のジェイムズ・ジョイス論のうちの一篇とサミュエル・バトラー論は、この雑誌に掲載された。モランジュは『哲学』を出版するだけでは飽きたらず、それとは別に『パンフレット作者の雑誌』（*Revue des pamphlétaires*）を出すことを計画する。「パンフレット（pamphlet）」とは『新プチ・ロベール』（一九九三）によれば、「政治形態、諸制度、宗教、有名な人物をはげしく攻撃する、短い諷刺的文書」のことで、モランジュは、社会の諸権力、諸制度にたいする攻撃・批判をおこない、世の中の変革に寄与したいと切望していた。彼は『パンフレット作者の雑誌』の創刊号の執筆者として、グリーンに白羽の矢を立てる。グリーンがモランジュから協力を依頼されるところは、一九六三年にプロン社から刊行された『パンフレット』の「前書き」で回想されている。モランジュはグリーンとブーローニュの森の小径を散歩しながら、自分が発刊するつもりの『パンフレッ

ト作者の雑誌』のために、何か書いてくれと頼む。グリーンが無言のままでいるので、モランジュは「じゃあ、君はどんな不満もないのかね？」と問い、「それでも君は、一九二四年に、この地上ですべてのことが最善に向かって進んでいるなんて信じられないだろ」と言う。[4] そして「結局、君がいちばん興味をもっているのは何だ？」[4] と訊く。グリーンは「宗教だ」[4] と答え、カトリック信者であることを言い継ぐ。するとモランジュはグリーンに、「同時代のカトリックの人びとに完全に共鳴しているかどうか知りたい」[4] と告げる。グリーンが「ノン」と返事すると、モランジュは「それじゃ、それを言えばよい。（…）さあ、それを言えよ」と応じ、「いいかい、ぼくたちがやろうとしていることは、とても大事なことなんだ。もしかして、君は宗教戦争をひき起こすことになるかもしれないんだよ」と言い足す。[4] 自尊心をくすぐられたグリーンは、何頁書けばよいのかとたずねる。モランジュは、「君だけで雑誌の第一号全体をひきうけるんだ。五十頁だ。君の言いたいことをすべて言いたまえ」[4] と返答する。

かくしてグリーンは、『フランス・カトリック信者たちに対するパンフレット』の作成にとりかかる。グリーンは憑かれたように原稿を書き、四日か五日で作品を完成させた。一九二四年四月のことである。その半年後の二四年十月十五日に作品は刊行される。ただし、この本はフランスの現代のカトリック信者たちを批判するという体裁をとっているので、家族は実名で本を公けにすることに反対した。そこでグリーンはテオフィル・ドラポルト（Théophile Delaporte）というペンネームで本を上梓する。ちなみに、Théophile とは、ギリシア語で「神を愛する」のことで、Delaporte は「扉の」を意味する。このペンネームについて、グリーンは一九六三年版テクストの「前書き」のなかで、こう解説している。

「要するに、テオフィルは、私が神を愛していることを明瞭に示していた。ではドラポルトについては……どんな扉か？私はそれを知らないほうがよかった。天国の扉もあれば、地獄の扉もあった……」。[5]

さて、出版された本の空色の表紙には、深紅の帯がかかっていて、その帯には太い文字で、「フランスの六人の枢機卿に捧ぐ」[5] と記されていた。これは、モランジュの発案によるものであって、グリーンじしんは、フランスの枢機卿が誰である

のかも、何人いるのかも知らなかった。カトリック教会への挑戦につながるこの献呈に、グリーンは恐れをいだく。けれどもグリーンの作品が公表されてからも、カトリック教会の平和はいささかもかき乱されなかった。モランジュが期待したような「宗教戦争」は勃発しなかった。グリーンは自分の知っている本屋に、印刷されたばかりの本を売るため、数冊店頭に置かせてもらっている。『パンフレット』はなんらセンセーションをまきおこすことはなかったのである。

もっとも、若干の作家・思想家がこの作品に注目した。まずマックス・ジャコブがこの本を読んで驚嘆し、称賛の手紙を書き送った。また、カトリックに改宗したこの詩人は、「『プロヴァンシアル』のパスカルの再来が誕生したぞ」といたるところで触れ歩いた[6]。アンドレ・ジードも、『パンフレット』を評価した。ジードは一九二九年四月にこの作品を読み返し、「私はこの文書の激越な調子、(…) 微温と凡庸さにたいする抗議が好きだ。反抗することや、憤慨することができない精神は、無価値な精神だ[7]」との感想を『日記』に綴っている。とはいえ、『パンフレット』をもっとも評価したのは、ジャック・マリタンである。『ベルクソン哲学』『聖トマス』の著者として知られる、このネオ・トミスムの思想家は、一九六三年版テクストの序文を書いているが、その序文のなかで、はじめて『パンフレット』を読んだときの記憶を呼び起こしながら、「何かしら悲嘆にくれたおののきを含む、これらのパスカル的な美しい輪郭のきびしさにたいする感嘆の念と、例外的なほど奥行きの深い魂の前にいきなり出たという感情[8]」とをいだいたと語っている。そして『パンフレット』が、「フランス文学の歴史のなかで、一つの決定的な転換期の証言[8]」であると言明している。マリタンは一九二五年、グリーンに面会をもとめ、以後、二人の交遊は、マリタンが他界する一九七二年までつづいた。七九年には、二人の往復書簡集である『大いなる友情』が公刊されている。

一九二二年七月、アメリカより帰国してから、一九二四年、『クリスティーヌ』『フランス・カトリック信者たちに対するパンフレット』を発表することによって文学的出発をするまでの、グリーンの外的・表面的な生の歩みを通観した。このことを踏まえて、同じ時期の、グリーンの内的な人生を瞥見することにしたい。この目的のために、まずグリーンの感情生活

を、次に肉体生活を、それから信仰生活を問題にすることにしたい。

二　感情生活

グリーンの感情生活を一瞥することにしよう。グリーンはマークへの不可能な愛の苦悩に耐えかねて、フランスへの帰国を一年早め、ヴァージニア大学を中退した。しかし帰仏後も、グリーンはマークのことを忘れることはできない。相変わらずマークのことを想いつづける。パリでの生活を再開してからしばらくして、グリーンは姉マリーにマークのことを話している。

「私は、マークがこの世でもっともすばらしい青年であり、彼のことしか考えていない、とマリーに言った。《要するに、と彼女は愛情のこもったほほえみを浮かべて私の話を聞いたあと言った、恋愛がかった友情（amitié amoureuse）のようなものね……》

この頃、こんな表題をもつ本[9]が、わずかではあるがまだ出まわっていたことを言わなければならない。（…）私は顔を赤らめたにちがいない。友情ではなくて、まさしく愛が問題であることを伝えたい気持ちが私の心に浮かんだ。何かが私をひきとめた。私はその何かを、臆病さを恥じるように、恥ずかしく思った」（『青春』V、一二八七―一二八八頁。強調はグリーン）。

グリーンはマリーから、マークにたいしていだく感情が「恋愛がかった友情」だと教示されて、「友情」ではなく正真正銘の「愛」であることをわからせたい欲求を感じている。だがグリーンはそれを言うことができない。もしマークへの感情が愛であると告げれば、自分が同性愛者であることを露呈することになるからだ。愛を秘密として生きなければならないことの苦しみの念がうかがえる。グリーンは、「何かが私をひきとめた。私はその何かを、臆病さを恥じるように、恥ずかし

く思った」と述懐している。彼の恥辱の感情は、愛を公言できないことのいら立ちに立脚していると思われる。ともかく、グリーンがマリーにマークのことを話し、「彼のことしか考えていない」と打ち明けているという事実から、帰仏後も彼がマークのことを想いつづけていることが明確となる。

グリーンは帰国した当初、朝のミサや晩の聖体降福式に列席していた。彼は礼拝堂においても、マークのことを思い出している。『青春』のなかでは、次のような文章を読むことができる。

「毎朝、私は、私たちの家の隣りにある礼拝堂でとなえられる八時のミサに出かけていた。晩は、有益で、まだ罪のなかった散歩からもどって、昔と同じ陶酔の気持ちをいだいて聖体降福式に列席していた。その式のとき、金色の光線を放つ聖体顕示台のほうに達する、あの美しくて感情のこもらない声で歌われるラテン語の聖歌を、私は聞いていた。昔と何も変わっていなかった。いや、しかし変わっていたのだ。礼拝堂でさえ、記憶によって、マークの顔をまざまざと思い出すということがあった。マークは大西洋の彼方の、大学の木蔭の下で私にほほえんでいた。彼のことを考えるのは罪ではなかった」[10]（V、一二八四―一二八五頁）。

グリーンは礼拝堂のなかで、ミサや聖体降福式のとき、ほほえむマークの顔を思い浮かべている。宗教的な儀式の際に、マークのことを想っている点から、人間的な愛が宗教にいやまさるほどに、愛が信仰を圧倒するほどに強いことがたしかめられる。けれども、ここでグリーンの信仰の衰えを云々することはできない。なぜなら彼はミサや聖体降福式に参列しているのだから。グリーンはさいごに、「彼のことを考えるのは罪ではなかった」と断言している。マークへの愛はプラトニックなものであった。それゆえに、グリーンは宗教的儀式のさなかにマークのことに思いをはせることができるのであろう。この一節からは、マークへの愛の強さとともに、グリーンの内心では、愛と信仰とが両立していることを読みとるべきである。

グリーンが帰仏することによって、マークとの交遊は一応終わった。しかしマークとの関係は完全に断たれたわけではな

い。マークはグリーンに手紙を書き、文通というかたちで、二人の交際はつづいた。『青春』のなかで、次のような記述が見いだされる。

「彼〔マーク〕は時どき、私に便りをよこした。だが彼の手紙は、いつも私が見たいと希望するものを、すなわち、ほほえみや少しの愛情を、けっして含んではいなかった。彼が書くために手を置いたところに、私は十回も二十回もつづけて唇を押し当てた。大西洋が二人のあいだに広がっている今、もしかして私は愛を打ち明ける勇気をもてるかもしれない。もちろんそうではなかった。そうするだけの勇気がまさしくなかった。彼が私たちの文通を終わらせるのではないかと恐れたからだ。私は自分を慰めるために、孤独のなかで彼に話しかけていた。そのとき、なんという大胆さが私を動かしていたことだろう。私の情熱はなんと声高く、明瞭に話しかけていたことだろう。だが私はコルタンベール通りの、自分の小さな暗い部屋のなかで、大声を出していただけだった。一方、彼はといえば、そこから、四千キロも離れたヴァージニアで、息をしているのだ。私の人生の一部分はすっかり終わっていた。私にはそのことがよくわかっていた」（V、一二九三頁）。

このように、マークは、グリーンが期待するような、愛情のこもった内容のものではなかったとはいえ、グリーンに便りを書いていた。グリーンは、「彼が書くために手を置いたところに、私は十回も二十回もつづけて唇を押し当てた」と振り返っているごとく、マークの手紙に接吻している。このふるまいは、グリーンの愛の情熱のはげしさを浮き彫りにする。グリーンは手紙で、マークに愛を打ち明けることを思いつく。けれども文通が終わりになることを恐れて、愛を告白しない。そのかわりに、誰もいない部屋のなかで、情熱の言葉を声高に投げ放つ。だがこの言葉は当然のことながら、大西洋の彼方にいるマークのもとにはとどかず、自己の内心にもどってくるだけである。グリーンの行為は、一種の告白である。だが聞き手のいない告白のいとなみは、独房の壁に向かって呼ばわる行為に等しい。壁に向かって発せられた言葉は、愛の秘密をもつことの苦しみを反響させるこだまとして返ってくるだけである。ちなみに、グリーンの第一期（初期）の小説『アドリ

エンヌ・ムジュラ』のなかで、医師のモルクールに愛の情熱をいだく女主人公アドリエンヌは、医師への接近をくわだてるかわりに、深夜、自分ひとりの淋しい部屋のなかで、「誰にも聞こえないように、両手で口をおさえて、モルクールの名を大声で呼」んでいる（Ⅰ、三二九頁）。アドリエンヌはモルクールの名を、「十回、二十回」と繰り返し呼ぶ（Ⅰ、三三〇頁）。アドリエンヌのこの行為は、グリーンが孤独のなかで愛の言葉を大声で言い放つという行為と類似性を有している。どちらの行為も、告白の不可能性とともに、不可能な愛の情熱をもつことの不毛性を際立たせている。グリーンは、「私の人生の一部分はすっかり終わっていた。私にはそのことがよくわかっていた」と締めくくっている。彼は自伝『遙かな土地』のなかで、「私はもはや不可能な愛の犠牲者でありたくなかった」（Ⅴ、一二三頁）と打ち明けている。グリーンは不可能な愛の苦悩にけりをつけるために、アメリカをあとにした。「私の人生の一部分はすっかり終わっていた」という認識は、彼が不可能な愛の時代と訣別したことを暗示している。とはいえ、グリーンが帰仏後も依然としてマークにはげしい情熱をいだいているという事実には留意すべきである。

グリーンは別の折にも、マークへの手紙のなかで胸中を披瀝しようとしている。『青春』において、彼は次のように顧みている。

「悲嘆にくれているとき、私はマークに手紙を書き、彼方の、大学のキャンパスの大きな樹々の下に、いっしょにいるところを想像したものだった。そして文を書きはじめるたびごとに、私は今まで彼にすることができなかった告白をまさにしようとしているような気がした。しかし文は急に方向を変え、取るに足りないことにそれるのだった。私は自分が愛し、そのことをけっして知らないであろう人から数千キロも離れて、一枚の紙の前に向かっているときでさえ、押し黙ったままであった」（Ⅴ、一三三六頁）。

グリーンはマークに宛てて手紙をしたためているとき、「文を書きはじめるたびごとに、私は今まで彼にすることができなかった告白をまさにしているような気がした」とあるように、告白の衝動を感じている。実際に対面しているときとはち

がって、手紙のなかでなら、相手の反応を気にすることなく、一方的に《Je t'aime.》と肺肝をひらくことができるからだ。しかし「文は急に方向を変え、取るに足りないことにそれるのだった」と叙述されているごとく、グリーンは告白することをためらい、事の核心に入っていくことができない。「取るに足りないこと」に話題を変えてしまうのである。ここでもまた、マークへの愛が沈黙のなかで、秘密として生きられていることを確認することができる。

さて、マークは一九二三年の七月にフランスにやってくることになる。グリーンはマークからの手紙でそのことを知る。彼はマークへの想いにとらえられる。『青春』のなかで、グリーンはマークの来仏を知った頃のことを、こう思い返している。

「待つことは、ほとんど受け入れ難いことであった。それに反証が出るまで、非常に大きな幸福が自分には用意されていると、私は信ずることができた。それがどんなに奇妙なことに思われようと、私の愛の夢想には肉欲は混ざっていなかった。他の人たちを相手に私が経験したいかなる愛撫も、マークとでは考えられない気がした。私はただ彼を胸に抱きしめ、彼の顔に触れることだけを望んでいた。バラ色がかった褐色の美しい頬に、瞼に、口に、黒い髪に指で触れるのだ。ほかのことは何も、彼に嫌悪の念をいだかせ、二人を引き離すことになるかもしれないことは何も、望んでいなかった。再び私は彼のからだの匂いをかぐことになるだろう。無知のために、私はこれらの欲求のなかに、無邪気な情熱の衝動しか見ていなかった。だがいかにひそかではげしい飢えがそこには隠れていたことであろうか……」(V、一三七〇頁)。

グリーンはフランスにやってくるはずのマークのことに思いをはせながら、「彼を胸に抱きしめ、彼の顔に触れる」ことを「望んでい」る。この望みは、グリーンが肉体的欲求に支配されていることを示しているのではないだろうか。だがグリーンは自己の欲求のなかに、「無邪気な情熱の衝動しか見ていな」い。「それがどんなに奇妙なことに思われようと、私の愛の夢想には肉欲は混ざっていなかった」とグリーンは断じている。「他の人たちを相手に私が経験したいかなる愛撫も、マー

クとでは考えられない気がした」とも明言している。「他の人たちを相手に」グリーンが「経験した」ところの「愛撫」については、次章で、彼の肉体生活を問題にするとき調査するが、しかしマークを抱きしめ、彼の顔に触れたいという願いは、その行為が「他の人たちを相手に」する「愛撫」とはことなるとしても、肉体的な欲望を証(あか)すものであると思われる。グリーンは、「再び私は彼のからだの匂いをかぐことになるだろう」と予測している。この予測は、グリーンがマークの肉体を意識していることを明示している。グリーンの愛する思いのなかに、肉欲が混入していることを認めるべきである。グリーンはさいごに、「いかにひそかではげしい飢えが（…）隠れていたことであろうか」と内省している。ここでの「飢え」(faim)とは肉体の飢えのことである。グリーンのマークにたいする愛はプラトニックな愛である。欲望を排除しようとするこの愛はかえって逆に、愛する人を欲望で苦しめることになるのである。[11]

一九二三年の七月、マークは友人のひとりとともにフランスにやってくる。二人がパリに着いた最初の日、グリーンは二人を自宅に連れ帰り、泊まらせる。マークの友だちは大きい客間で眠り、マークは小さいほうの客間で寝ることになる。『青春』のなかでは、その夜のグリーンのふるまいが詳述されている。

「夜遅く、私は廊下にそっと出て、愛する人が眠っている小さな客間のドアまで行く。家中、そして通りでも、物音ひとつしない。まるでまち全体が死に見舞われたかのようだ。出入り口の扉のうえに、わたしは絶望して手を、頬を、唇を置く。なぜ私はもっと大胆にならないのだろう！

だが私はマークに、愛していると言う勇気はけっしてないだろう。別の人なら、とても静かに、泥棒のようにそっとドアを開けて、少なくとも眠っているマークを眺めに行くことだろう。私はその別の人ではなく、私でしかない。私は悲しくて死にそうである。

（…）私は神のことを考えていなかったとしても、悪いことをしているという感情もまた持ってはいなかった。これは純粋な愛にすぎないのだ。そして当時の私の考えによれば、純粋な愛は、私たちの肉体の汚れから私たちを洗い清め

てくれるものなのだ。それゆえに、私はマークに愛していると言いたかった。彼と私とのあいだには、ごく簡単に開けることもできたであろう、このドアの厚みしかなかった。小説ならば、ドアは開けられたであろう。しかし私の小説はちがっていた」（V、一三七二頁）。

グリーンは深夜、自室を抜け出し、マークが眠っている小さな客間の出入り口の前に立つ。それはなぜか。「私はマークに愛していると言いたかった」と説明しているように、何よりもまず、告白の衝動にかられたためである。だがグリーンは、自分をマークからへだてるドアを開けることができない。マークはドアの向こうにいる。マークのすぐそばにいるのに、マークは依然として遥かな存在である。ここから告白の不可能性が浮かび上がってくる。けれどもグリーンが小さな客間に近づくのは、ただ単に、告白の欲求をいだいたためだけであろうか。グリーンの挙動には、愛の欲望もまた関与しているのではないだろうか。グリーンは第二段落で、「別の人なら、（…）少なくとも眠っているマークを眺めに行くことだろう」と思索している。眠る人を眺めるという行為は、ジャック・プチも指摘するように、「不可能な所有の代替物[12]」にほかならない。この行為は、性の交わりがそうであるように、欲望の対象を所有する行為に代わるものとうけとれる。眠る人は単なる〈もの〉と化すがゆえに、自由に好きなだけ見ることができ、見ることの欲求を思う存分満たすことができるからだ。あるいは、眠っているマークを眺めたいという気持ちがなくても、愛する存在に接近するという行動は、その存在を所有したいという欲求のあらわれだと解釈することもできる。げんにグリーンは第一段落で、ドアを開けるかわりに、「出入り口の扉のうえ」に、「手」や「頬」や「唇」を「置」いている。ここでの「出入り口の扉」はマークの代わりをするものである。グリーンのふるまいは、告白の欲求に起因するだけでなく、愛の欲望、肉体的な欲望にも立脚している。グリーンは、「これは純粋な愛にすぎないのだ」と黙考している。しかしながら、マークへの愛は純粋であると同時に、官能的なものでもあったことを認めるべきである。

マークはパリに着いて、グリーンの家で一泊したあと、翌日には、ギシャール通りにある小さな下宿屋に身を落ちつける。

フランスにいっしょにきた彼の友だち[13]は別のところに住むことになる。マークの下宿先はコルタンベール通りのグリーンの家から近く、「三、四分のところ」（『青春』V、一三七四頁）にあった。かくしてマークとの交遊が復活する。翌日、グリーンはマークを昼食に招待しているし、マークに、「世界中でもっとも美しいまち」（『青春』V、一三七四頁）であるパリを案内している。そしてまもなく、グリーンがマークに愛を告白しようとして失敗するという出来事が起こる。すなわちグリーンは一九二三年のある朝、マークとセーヌ河畔を散歩中、突然マークに愛の告白をすることを決意し、ポン＝ロワイヤルを渡るまでに話そうと思う。だがグリーンはマークの友情をうしなうことを恐れて、告白を断念する。この事件については、グリーンの留学時代を吟味したときにすでに取り上げている[14]ので、ここでは、『青春』においてどのように物語られているかだけを見ておくことにしたい。

「《マーク、君に言わなければならない重要なことがあるんだ》

少なくともこの文句は難なく私の口にのぼった。

《聞こう、ジュリアン》

（…）

《残念だが、言えないよ、マーク》

私は彼をうしなうことを恐れていたのだ。

マークは私を見ていなかった。私は彼の横顔を見ていた。彼はきわめて簡単に言った。

《ねえ、わかるよ。まったくよくわかるよ》

それは文字どおりほんとうだった。彼はずいぶんと前から、ヴァージニアで私が彼の部屋のドアをノックしに行った晩から、すべてを理解していたのだ。その日、私はそのことを確信していた。今や、私の不幸な秘密の重荷を再び背負わねばならなかった。もし私がこの告白をおこなうことができておれば、マークは私の勇気に感服していただろう。お

そらく彼は、私がとても内気だと思っていたのであろう。しかし私は彼の友情をうしなわなかった。彼の友情は、私が苦しむだけの値打ちがあったのだ」（一三七六―一三七七頁）。

『青春』の記述は、自伝第三巻『遥かな土地』のそれとくらべて進展が見られる。『遥かな土地』では、グリーンが「言えないよ」と告げたときのマークの反応が、「とてもよくわかるよ（Je comprends très bien.）」（V、一二五七頁）であったのにたいし、『青春』では、マークは「まったくよくわかるよ（...je comprends parfaitement.）」と応じている。「とてもよく」（très bien）よりも、「まったくよく」（parfaitement）のほうが、わかり方の度合いが高いことは、論を俟たない。このあと、「それは文字どおりほんとうだった。彼はずいぶんと前から、ヴァージニアで私が彼の部屋のドアをノックしに行った晩から、すべてを理解していたのだ」という文章がつづく。グリーンは、マークが自分の内心の感情を完全に理解していたかのごとく推測している。しかしそうは言っても、愛の告白に挫折したこの出来事は、「今や、私の不幸な秘密の重荷を再び背負わねばならなかった」と認めているように、苦渋にみちた体験であることに変わりはない。マークへの愛は、たとえマークがわかっていたとしても、「不幸な秘密」にとどまるのである。グリーンはさいごに、「私は彼の友情をうしなわなかった。彼の友情は、私が苦しむだけの値打ちがあったのだ」と述べている。グリーンは沈黙をまもり、自らの愛を秘密にすることで、マークとの友情が保たれたと考察している。けれども友情は友情でしかない。マークとの愛は、グリーンが告白を断念することで、実質的には終止符を打つのである。

こののち、グリーンはマークとあまり会っていない。マークは一九二四年の夏まで、パリに滞在する。パリ案内が終わったあと、グリーンはマークと彼の友だちと三人でノルマンディー方面に旅行し、モン・サン＝ミシェルやドル＝ド＝ブルターニュやカーンやルーアンを訪れるものの、旅から帰ったあと、マークはギシャール通りの下宿屋を離れる。カルチエ・ラタンにある部屋を友人と共有することになる。グリーンとマークはいっしょに時間をすごすことなく、それぞれの日々を送る。『青春』において、マークが引っ越しをしてから、グリーンがさいごにマークと出会うまでは、合計四十六の断章が見られ、

プレイアード版では六十五頁の間隔が空いている。しかしマークは、さいごの出会いをふくめて、二箇所でしか出てこない。この事実は、二人が疎遠になったことを示唆している。グリーンはどうしてマークと会わなくなるのだろうか。この点にかんして、グリーンは『青春』のなかで、「おそらく私はむなしく苦しむことにうんざりとした気持ちをいだいていたのであろう」（V、一三九八頁）と推考している。ポン＝ロワイヤルで愛の告白に挫折した瞬間から、愛の展開は望めなくなった。愛することをやめないかぎり、会っても苦しみをひき起こすだけである。グリーンはこれ以上、苦しみたくないために、マークと会わないことにするのである。

『青春』のなかの、旅からもどったあとの二度の出会いの場面を見ておくことにしよう。最初の場面は、グリーンがマークの部屋を訪れるところを描いている。このとき、マークは病いのためにベッドに伏せっている。一緒に部屋を借りている彼の友人は、窓のそばにいて、大したことはないとグリーンに告げる。マークが病気なので、グリーンはしばらくして帰ろうとする。その際、ポケットから一冊の本をはみ出させてしまう。マークはその本を注視する。グリーンが部屋を出、階段をおりようとしたとき、ドアの向こう側から、次のような声がするのを、彼は耳にする。

「君はあいつのポケットのなかのあの本を見たかい？　とマークの声、生気がなくて病人の声がした。『悪の花』だよ。ほらジュリアンはまだ惨めな境遇のなかにいるんだ。あいつは少なくとも週に一度は女と寝ているんだ……」（V、一三九九頁）。

マークは、グリーンがボードレールの『悪の花』を読んでいるのを知って、グリーンが「少なくとも週に一度は女と寝ている」と誤解する。マークがグリーンの同性愛の性向を知らなかったことがわかる。グリーンの場合は、愛の感情も、肉体的欲望も、異性にではなく、同性に向かう正真正銘の同性愛者であった。またマークの誤解から、マークのほうは同性愛者ではないことが察知できる。グリーンはこの言葉を聞いて、マークに愛を告白しないでよかったと思っている。

今度は、グリーンがマークとさいごに出会う場面を見ることにしよう。この場面はもちろん別れの場面でもある。『フラ

ンス・カトリック信者たちに対するパンフレット』の校正刷がとどいた一九二四年の七月頃、グリーンはマークの出発が間近いことを知る。そこでグリーンはある朝、マークの部屋を訪ねる。グリーンは二人きりになるため、クリュニー美術館で見せたいものがあるという口実をもうけて、マークを外に連れ出し、リュクサンブール公園に行く。「もう君と会えないだろうからね」（V、一四四六頁）とグリーンは弁解する。グリーンは、「たとえ苦しまなければならないとしても、なぜもっとしばしば彼と会わなかったのだろう？」（V、一四四六頁）と自問する。二人は椅子に腰かける。このあとの件りを引用することにしよう。

「マークはこの世での、私の幸福のすべての可能性を、一緒に持って帰るのではないだろうか。彼にもっぱら愛されるためならば、私はいかに厳格な禁欲生活を送ることにも同意することであろう。これが少なくともその朝、私が思ったことであった。そのとき、すべては愛を語っていた。青空の下の地面も、花々も、樹々の葉も。胸をひき裂くようなそのひとときに、私がマークに言いえたすべてのことについての記憶は残っていない。彼から離れることによって私がうしなった時間を考えるたびごとに、私のふるまいは不可解に思えた。おそらく私は苦しみから逃れたかったのであろう。彼は、あまり真面目くさった態度をとらないいつものやさしさで、不意に言った、《ぼくらはまたいつか会えるよ。たぶんぼくはアメリカにもどるよ……》と。

しばらくして彼は立ち上がった。そして私たちはサン＝ミシェル大通りのほうに向かい、この大通りをサン＝ジェルマン大通りの曲がり角までおりて行った。そこで彼は私の手を取り、自分の手のなかに握った。（…）私は、マークの言っていることがわからなかった。彼がほほえんでいたので、私もまたほほえんでいた。それから彼は私と別れて、大通りを横切り、手を振った。あとのことは当然ありきたりである。私は帰宅した。自分があてどもない夢を追いかけていたのだと、そして肉を排除した愛はいくらかの性質の持ち主には受け入れがたいものでありつづけるのだということを今度は確信していた。しかしそれにもかかわらず、そのような愛が可能だと私はあくまで信じようとした。どこから

来たのかはわからないが、官能から解き放たれた愛は不滅であり、快楽は愛を殺すのだという確信が私の心の中で大きくなっていった」（V、一四四六―一四四七頁）。

長い引用になったが、マークとのさいごの出会い（別れ）の場面は以上のとおりである。グリーンはマークと別れるに際して、「マークはこの世での、私の幸福のすべての可能性を、一緒に持って帰るのではないだろうか。彼にもっぱら愛されるためならば、私はいかに厳格な禁欲生活を送ることにも同意することであろう」と黙想している。しかしグリーンは自分の「幸福」を獲得するための、あるいは、マークから「愛される」ための努力を何もしていない。「ぼくらはまたいつか会えるよ」というマークの言葉をだまって聞き、サン＝ミシェル大通りとサン＝ジェルマン大通りとの交差点で、マークが自分と握手したあと、自分から立ち去っていく姿をだまって見送っている。帰宅したグリーンは、自分が「あてどもない夢を追いかけていた」にすぎないと反省し、「肉を排除した愛はいくらかの性質の持ち主には受け入れがたいもの」であると思慮をめぐらせて、マークへの愛を否定的にとらえている。つまりマークへの愛がむなしくて不毛なものでしかなかったとの感慨に浸っている。けれどもグリーンはその一方で、「官能から解き放たれた愛は不滅であり、快楽は愛を殺すのだという確信」をいだいている。ここでは、マークへの愛を肯定しようとする心の動きが看取できる。マークへの愛は徹頭徹尾、不可能な愛であり、告白されない愛であった。グリーンは不毛な愛の情熱に苦しんだが、マークへの愛を肯定的にみなすことで、それはそれでよかったのだと思いなおしている。マークへの愛は官能性を帯びることもあったとはいえ、純粋であった。グリーンはプラトニックな愛を貫徹した。このことがマークへの愛を最終的に肯定することにつながったのだと判断することができる。

この章では、帰仏してからのグリーンの感情生活を問題にしているのであるが、『青春』において、マークとの関係だけが、そのすべてではない。感情生活の枠組みからはみ出るかもしれないけれども、グリーンが「アッシリアの天使」（V、一四二九頁）と呼ぶカミーユという人物にたいする彼の執着に言及する必要があるだろう。一九二三年の冬、文学者のフラ

ンソワ・ガショのところで、グリーンははじめて、アッシリアからきたカミーユと出会う。グリーンはカミーユの、天使のような顔の美しさに魅惑され、心を奪われる。カミーユはグリーンの内心の動揺に気づく。『青春』のなかで、この場面は次のように描出されている。

「私のことをわかり、すべてを理解するのに、彼〔カミーユ〕にはちらっと見るだけで十分だった。私は最悪のことを予想する。船乗りが空の奥を見て嵐を感じるように、苦しみがやってくるのを相変わらず感じながら。私は立ち去りたく思う。だがそれはもう不可能だ。分別をふりしぼって、私は見知らぬ人に一言もしゃべらない決心をする」（V、一四二七頁）。

グリーンはカミーユをはじめて見たとき、自分が苦しむであろうことを予想し、彼に「一言もしゃべらない決心」をしている。カミーユの美しい顔を見て、執着の気持ちを覚えたとはいえ、この気持ちが報われないだろうと直感する。通りに出たグリーンは、「たぶん私は夢を見たか、見方が悪かったのだろう。喉の渇きが何もない砂漠を泉の幻影で飾るように、魅惑的な顔を想像しただけなのだろう」（V、一四二七頁）と推察しているように、美に直面したことを否定し、美が幻にすぎなかったと思おうとする。

ところで、「何もない砂漠」に「泉の幻影」を見させるものが、「喉の渇き」であるとすれば、美の幻を見させるものは何か。肉の渇きである。カミーユを前にしてのグリーンの内的混乱は彼の肉の渇きと関係している。カミーユとの出会いののち、グリーンはますます肉の渇きをつのらせることになる。先の二つの引用文から二頁先で、グリーンは家の中で、父親が新聞に目を通しているあいだ、本を読んでいる。そのとき、グリーンはどうしようもない肉体の欲望に見舞われて外出したくなる。通りから通りへとほっつき歩いて、「精力を使い果たし、気をうしな」（V、一四二九頁）いたいと思う。グリーンは自らに、次のような問いを発している。

「この絶え間のない飢えは、何を意味するのだろうか？　もうひとつの飢えとまったく同じくらい残酷な飢えは？　だ

がこのもうひとつの飢えは決まった時刻に満たされるのに、人間の肉にたいする飽くことのない欲望――というのも、飢えとはそれのことであるからだが――はいかなる休息も知らないのだ」（V、一四二九頁）。

グリーンは肉体の飢え、「いかなる休息も知らない」ところの「人間の肉にたいする飽くことのない欲望」にとりつかれている。この飢えないし欲望がカミーユとの出会いを契機にしていやましたことは疑いを容れない。先述したとおり、グリーンはカミーユに「アッシリアの天使」という渾名をつけ、彼の美しい顔を「天使」の顔になぞらえている。だがカミーユの美は、グリーンを神のほうへいざなうどころか、欲望の苦しみ、肉体の飢えのなかにおとしいれる。グリーンはフランソワ・ガショのところで、カミーユと再会し、またしても彼の顔の美しさに眩惑され、彼の美が幻ではないことを悟る。グリーンは、「このような過度の美しさを前にして、聖書の重大な警告が私にたいして何をすることができるというのだろう」（V、一四三〇頁）と自問している。「聖書の重大な警告」というのが具体的に何を指すのかは書かれていない。しかしカミーユの美が、たとえ天使のような美しさであるとしても、グリーンを宗教から遠ざけるものであることが判明する。

再会ののち、カミーユから電話があって、自分のところにくるよう、グリーンを誘う。グリーンは承諾し、カミーユの部屋を訪れる。こうしてカミーユとの交遊がはじまる。カミーユが画家のマリー・ローランサンを連れて、グリーンの家にやってきたこともあった。だがカミーユはその後しばらくして、「もう会わないほうがよい」と「容赦なく」言い放つ（V、一四三九頁）。グリーンは「とてもたやすいことだよ」（V、一四三九頁）と答える。二人の交遊関係は短期間のうちに終わる。カミーユがなぜ交際を打ち切ろうとしたか、作中、なんの説明もなされていない。しかしグリーンがカミーユの提案をどうして容易に受け入れることができたかは、理解することができる。グリーンにとって、カミーユはいかなる存在であったのか。この点にかんして、グリーンははじめてカミーユの部屋を訪れた日の夜のことを、こう振り返っている。

「その夜、私は回顧的な賛嘆の状態のなかで床についた。私には、記憶によってのほうが、はじめは心を打たなかった若干の事柄がよりよく見えた。いったい彼〔カミーユ〕はいかなるタイプの肉体をしているのだろう？　私はそのこと

を考えていなかった。ただ彼の顔だけが私を魅了した。彼の顔はひとつの世界だった。あまりにも整った唇、しかしながら肉感的でとても赤い唇、極端に長い眉、頬の上のまつげの影、こうしたものがどうして一人の若者には与えられ、他の若者には拒まれているのか？　私は冷ややかな額を取り囲む黒い巻き毛まですばらしいと思った。マークもまた、黒い髪をしていた。だがマークはマークだった。そして私はマークに恋をしていた。それにたいして、カミーユには恋することができなかった。なぜなら、ありとあらゆる肉体的魅力をもつ彼には、愛をひき起こす人間的なぬくもりが欠けていたからだ」（V、一四三五頁）。

グリーンはカミーユをマークと比較している。マークもまた、天使のような顔だちをしていた。しかしグリーンは「マークに恋をしていた」のにたいし、「カミーユには恋することができな」い。というのも、「彼には、愛をひき起こす人間的なぬくもりが欠けていた」からである。別の箇所でグリーンは、「私が読みとろうとした金色の目の奥底には、《ノン》という、ただひとつの言葉以外の何も見わけられなかった」（V、一四三七頁）と告知している。カミーユは肉体的美貌をあまりにも誇るがゆえに、他者の愛をうけつけないというか、拒否するところがあったのである。それゆえに、グリーンはカミーユの美しさに「魅了」されつつも、彼をマークのように愛することはなかった。またカミーユの美は前述のように、グリーンを肉体の飢え、欲望の苦しみにおとしいれたけれども、グリーンがカミーユその人には肉体的欲望を感じていないことは、注目に値する。「いったい彼はいかなるタイプの肉体をしてしているのだろう？　私はそのことを考えていなかった。ただ彼の顔だけが私を魅了した」とグリーンは顧みている。グリーンはカミーユの肉体のことを思い浮かべていない。さいごの文で、「ありとあらゆる肉体的魅力」をカミーユは有していたと報告されている。だが一人でいるとき、グリーンが思い起こすのは、カミーユの顔だちである。カミーユはグリーンにとって、愛の対象でも、欲望の対象でもなかった。グリーンはカミーユの美の単なる崇拝者にすぎなかった。だからこそ、彼はカミーユと簡単に別れることができたのである。とはいえ、グリーンはカミーユの顔の美しさに魅惑され、カミーユに執着の感情をいだいた。したがって、カミーユはグリーンにとっ

て、マークほど大きな存在ではないにしても、カミーユの名は、グリーンがリセ時代に夢中になったフレデリック、従軍時代に執着したテッド、あるいは留学時代に「動物的な愛」（『遥かな土地』V、一一四九頁）の対象となったニコルズといった名前とともに、銘記されるべきである。

『青春』のさいごから二番目の断章のなかで、もうひとつの出会いが想起されている。この出会いは、カミーユとの出会いよりもはるかに大事であり、マークとの出会いに比肩するほどの重要性をもっている。一九二四年十一月二十二日、グリーンは友人の文学者フィリップに連れられて、『ルヴュ・エブドマデール』という雑誌の編集長のフランソワ・ル・グリの家で催されるパーティーに嫌々ながら出かける。というのも、グリーンは社交界とか文芸サロンというものが苦手であり、好きではなかったからだ。しかしフィリップの執拗な誘いに屈したのである。パーティーには、アンナ・ド・ノアイユやフランソワ・モーリアックなどの著名人がきていた。グリーンは大勢の人びとのなかで、おじ気づき、不安になり、耳が聞こえず、目も見えなくなる。人に紹介されても、名前が聞きとれず、顔が「霧のようなもので隠され」てしまう（V、一四六二頁）。そんな中で、ホストのフランソワ・ル・グリはグリーンをモーリアックにひき合わせようとする。このときのことは自伝のなかで、次のように再現されている。

「私たちの主人が、私の手を取りにやってくる。（…）恐ろしいことに、彼は私を連れて、人を馬鹿にしたような男性〔モーリアック〕のほうに進んでいく。『パンフレット』という言葉が聞こえる。私は即座に走って逃げ出したくなる。だがまさしく『パンフレット』のことが問題になる。田舎臭い声が何ごとかを言う。当然、私は何か答えなければならない。ところが、私にはよく聞こえなかったので、何と言っていいのかわからず、先程の戸口[15]のほうに戻る。しばらくして、私は隣りの部屋に忍び込み、そこから出口に向かうだろう。しかし誰かが私に近づいてくる。

大きな、物思いにふけった目をした、この美しい顔は、今までどこにあったのだろう？　微笑をともなったやさしい声が、ここに集まった皆がどんな印象を与えるかをたずねる。私はどう答えてよいかわからない。それは大したことで

はない。ただひとつの視線から愛が生まれる。そして私は苦しまなければならないことを非常に恐れる。私は苦しむことに慣れ、人が愛することのできない人間ではないのか。しかし今回は私が間違っている。幸福の歳月が私を待っている。私の青春のなかでもっとも美しい歳月が」（V、一四六三―一四六四頁）。

グリーンは、サロンの雰囲気になじめず、パーティー会場から逃げ去ろうとしていたとき、「大きな、物思いにふけった目」をした「美しい顔」の青年に話しかけられる。そして「ただひとつの視線から愛が生まれる」と追懐しているごとく、その青年を恋するようになる。グリーンは、「私は（…）、人が愛することのできない人間ではないのか」と心の中でつぶやいている。自分が愛されないと思いこんで、マークへの愛に苦しんだのと同様に、苦しまねばならないことを予感する。しかしながら、このあとグリーンは、「今回は私が間違っている」と知らせている。青年との出会いは彼に苦しみをもたらすものではなかった。さいごに、「幸福の歳月が私を待っている」と伝えているように、この青年との出会い以降、グリーンは「幸福な歳月」を送ることになる。自伝『青春』のなかで、この青年は名前を与えられていない。しかし名前を特定することができる。この青年はロベール・ド・サン＝ジャン[16]である。というのも、ロベール・ド・サン＝ジャンは当時、『ルヴュ・エブドマデール』の副編集長をしており、パーティーはこの雑誌の編集長の家でおこなわれているからである。またグリーンは、一九二六年からの『日記』のなかで、しばしばロベールのことに言及し、彼への愛を告白しているからである。グリーンは作家になってから、イタリア、ドイツ、オーストリア、スイス、英国、中近東などといったように、ほぼ毎年旅行する。この旅行には、大抵の場合、ロベールが同行している。ロベール・ド・サン＝ジャンはグリーンの同伴者のごとき存在となる。ロベールは一九八七年一月十六日に世を去る。『日記』第十四巻『祖国を離れた人』において、グリーンはこの日を、「私の人生でもっとも悲劇的な日々のひとつ[17]」とみなし、「完全に閉じることはけっしてなかった傷口を私のこころにもたらした[17]」と彼が言う一九一四年十二月二十七日に匹敵させている。一九一四年十二月二十七日とは、グリーンの母親が死んだ日である。グリーンにとって、ロベールをうしなったことの悲しみと、最愛の母が息をひきとった日の悲しみとは、同等の

ものである。ロベール・ド・サン＝ジャンは母親と同じ程度に大切な存在であった。このような『日記』のなかの記述を勘案するとき、一九二四年十一月に、フランソワ・ル・グリの家で出会った若者が、ロベール・ド・サン・ジャンであることが疑いようもないかたちで了解される。

ロベール・ド・サン＝ジャンとの最初の出会いは、『青春の終わり』のなかでも追想されている。『青春の終わり』は一九八四年、スイユ社からグリーンの自伝が『若き歳月』(*Jeunes années*) という総題のもとに、二巻本として刊行されたとき、『青春』のあとに添えて発表された自伝的文章である。プレイアード版では五十頁からなり、『フランス・カトリック信者たちに対するパンフレット』を出版したあと、『もうひとつの眠り』を書きはじめる頃までの時期を扱っている。『青春の終わり』は、分量が少ないので完全な自伝作品とはいえない。けれども自伝第四巻『青春』の続篇をなす小品である。グリーンはこの小品のなかで、ロベールとのはじめての出会いを、次のように思い起こしている。

「一九二四年の十一月、フランソワ・ル・グリのサロンで、私の心の中であまりにも大きな位置を占めようとしている人を見たとき、私は自分の人生が変わるだろうという確信をいだいた。そのため、よろこびよりも恐怖に近い気持ちの高ぶりを覚えた。愛に夢中になっている、そのとおりだった。数年前、マークに夢中になったときと同じ唐突さと、同じ絶対の感情をともなって、心情が欲望に打ち勝っていた。不思議なことに、心情と欲望とは共存できないのであった。いかなる性欲もないのに、これほどはげしい愛が萌芽として含む無限の複雑さを、私は漠然とさえ理解していなかった」(Ⅵ、八五八頁)。

この一節から、グリーンがロベール・ド・サン＝ジャンを一目見ることで、はげしい愛にとらえられたことが明白となる。「愛に夢中になっている、そのとおりだった」という文や、はじめに述べられているように、ロベールが、グリーンの「心の中であまりにも大きな位置を占めようとしている人」であるという事実は、そのことを如実に示す。さいごの文では、「これほどはげしい愛」という表現もみられる。このように、グリーンはロベールをはじめて見ることによって、マークと

出会ったときと同じく、愛の情熱に襲われる。ロベールへの愛は、マークへの愛と同様に、宿命的なものと形容しうる。また、ロベールにたいする愛には、欲望がともなっていないという点にも是非とも注意を払う必要がある。グリーンは、「心情が欲望に打ち勝っていた」と指摘し、さいごの文では、「いかなる性欲もないのに」と言っている。ロベールへの愛は、肉体的なものではなかった。この点においても、マークへの愛との共通性が見てとれる。こののち、グリーンはロベールと交遊関係をもち、その関係はロベールが不帰の客となるまでつづく。ロベールへの愛は、マークへの愛とはちがって、不可能な愛ではない。しかしこの愛は、いかにはげしいとしても、肉体的な愛ではないことから、ロベール・ド・サン＝ジャンは第二のマークであると認定することができる。

自伝『青春』を手がかりにしつつ、グリーンが帰仏してから、ロベール・ド・サン＝ジャンと出会うまでの、彼の感情生活をたどった。『青春』は、ロベールとの出会いの場面でほぼ終わっている。こののち、ロベールとの関係がどのように進展するのかを明らかにすることが、今後の課題になることを確認して、この章を終わりたい。

註

(1) 拙稿「ジュリアン・グリーンの出発（一）（二）（三）」（山口大学「独仏文学」第二十二号・第二十三号、二〇〇一年二月・十二月、同「文学会志」第五十一巻、二〇〇一年二月）、「ジュリアン・グリーンの思春期」（山口大学「独仏文学」第二十五号、二〇〇三年十二月）、および「ジュリアン・グリーンの留学時代」（山口大学「独仏文学」第二十七号、二〇〇五年十二月）を参照。

(2) 一番目の姉エレオノールは、イギリス人と結婚し、イタリアのジェノヴァに住んでいた。四番目の姉レッタは、一九一八年一月に世を去っている。

(3) 一九九四年、フェイヤール社から刊行された『ディオニュソス』に付された「発行者の註」によれば、この作品が作成されたのは、一九二二

年となっている。しかしブレイク論の執筆と並行して書かれたのであるから、一九二三年に制作されたと推定できる。

(4) 《Avant-propos》 du *Pamphlet, Œuvres complètes* de Julien Green, t.I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1972, p.1228.

(5) 同右、一二三〇頁。

(6) ジュリアン・グリーン『信仰の卑俗化に抗して――フランスのカトリック信者へのパンフレ――』(原田武訳、青山社、一九九三) の「訳注」、一三二頁を参照。

(7) André Gide: *Journal II, 1926-1950*, 7 avril 1929, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1997, p.125.

(8) Jacques Maritain: 《Préface》 au *Pamphlet contre les catholiques de France*, Plon, 1963, p.9.

(9) プレイアード版の「註」によれば、*Amitié amoureuse* という表題の小説は一八九六年、カルマン・レヴィ社から刊行されたという (V、一六七九頁)。

(10) 強調は引用者。以下、特にことわらないかぎり、強調は引用者によるものとする。

(11) プラトニックな愛が永遠の欲望をもたらすことについては、拙稿「ジュリアン・グリーンの留学時代」のなかで、少し詳しく論じたことがあった (山口大学「独仏文学」第二十七号、二〇〇五、七三―七四頁)。

(12) Jacques Petit: 《Notes》 pour *Mille chemins ouverts, Œuvres complètes* de Julien Green, t.V, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1977, p.1628.

(13) 自伝第三巻『遥かな土地』では、この友だちはエルマーという名前をもっているが、『青春』では、名前が与えられていない。

(14) 拙稿「ジュリアン・グリーンの留学時代」、七九―八一頁を参照。

(15) このパーティーのとき、グリーンは「より小さな部屋に通じる戸口」(V、一四六二頁) のほうに逃げていた。

(16) ロベール・ド・サン＝ジャンは一九三六年に、小説『聖なる火』を刊行している。また『彼自身によるジュリアン・グリーン』(一九六七) という、グリーンにかんする研究書も著わしている。

(17) *L'Expatrié, Journal 1984-1990*, 18 janvier 1987, Seuil, 1990, p.259.